

## 第3節 埼玉県立春日部高等学校教諭に任ぜられる

### 1. 着任—人間的成長

#### 着 任

昭和51(1976)年 4月に春日部高校に着任した。男子校の校長先生が私に「来い」と言ってきたことは有り難かった。これで女の子の目を気にせずに教育に没頭できる。春高の生徒達は学力もそうだが、人間的にも素晴らしかった。学力が春高で中以下であっても、その中以下の生徒にこそ、人間的思いやりのある生徒がたくさんいたように私には思えた。授業では、私が長年やってみてきた作曲の授業に没頭した。そして作曲の授業の全県研究授業ができた。この学校にいる音楽教師は、外郭団体との結びつきをもって、地域文化の発展と向上に寄与するという務めがあると私は考えた。外郭団体の役職をこなしながら勤め、しかも学校のための実績をも上げることは、並大抵な努力では効果は上がらなかった。

#### 担任

春高にきて、最初に3年間担任した学年団で、私は私文1系を担当して卒業生を出した。その中にモーリス・アンドレ国際トランペットコンクール4位の島田俊夫、東京芸術大学作曲科を現役で合格した加茂下裕らが出た。島田は現在芸大オーケストラで首席トランペット奏者であり、加茂下は数々の作曲コンクールで受賞し、現在私が代表をつとめるグループ「蒼」に3年間所属したことがあった。その後も4年サイクルで担任し卒業生を出したが、すべて理系の生徒達であった。校務分掌は進路指導部と教務部を担当した。前任校が杉戸農業高校だったので、大学進学の見込み状況をまったく知らなかったこと、芸術科の代表としての教務部担当である。進路指導部は4年サイクルでのクラス担任だから、三年間進路指導を担当すると4年目は別の分掌に移ったが、教務部は15年以上変わらなかった。教務の顔のようになってしまい、分掌の顔ぶれ刷新が話題になって総務部が変わった。日々の時間割変更には相当詳しくなった。

#### 吹奏楽連盟

外郭団体の役員は、杉戸農業高校時代から埼玉高音研、埼玉吹連、埼玉高文連をずっと続けた。吹奏楽連盟主催で東部地区吹奏演奏会を開催したい。後援を取り付けるのに埼玉葛教育事務所他の教育委員会に出向いて東部地区全域の後援が取れないかを尋ねという苦労もあったが、県教育委員会社会教育課から後援が取れて、開催にこぎ着けることが出来た。杉戸農業高校で「杉農フェスティバル」を10年間開催してきたのと同じように、吹奏楽コンクールの前に、課題曲自由曲を演奏できるステージが春高でも欲しいという、単純な発想から生まれた企画なのである。杉戸農業高校には何年間か遅れたが、春日部高校は神田先生の時代から定期演奏会が大宮民会館で開催され始めていた。だから東部地区吹奏楽演奏会が欲しかった。30校位の加盟団数で、各学校に春高応接室で手紙を書いた。青刷りのファックスというコピー機で間に合うくらいの加盟団体数だった。春日部高校に着任した当時、東部地区では越谷栄進中学の立沢先生、岩槻中学の川上先生、草加中学の田島先生が熱心に指導されておられた。高校では不動岡高校の鈴木先生、岩槻商業高の岩崎先生、草加高校の深田先生がおられた。

思えば人一倍の行動力があつたと思う。畑和知事になって、埼玉県東部地区の爆発的発展が始まった。東部の人口増と学校



吹奏楽連盟役員時代

数の増加である。高等学校が東部8校から5倍に増えた。中学校は100校を越えた。東部地区は県で第二の加盟団体数に成長した。今後どのような方向へ進むべきか。そのような能力は私にはないけれど、実力・行動力、発言力のある人材が多く育てて欲しいと思う。楽才のある人も欲しい。コンクールは、やはり教育であろう。人が何と理由をつけてみても、勝つことだとか、参加することだとか、吹連が独立採算で運営していようと、釈迦の手のひらのように、やっていることは「人の教育」という手のひらから逃れられない。

## 2. 春日部高校の部活動

吹奏楽部では部員募集にあたって、吹奏楽部員の大学現役合格率アップの実績を宣伝材料にした。吹奏楽部から私立大学の早稲田・慶応は言うに及ばず、国立大学や東京大学に毎年現役合格者を多数出した。

現役合格率は、学年・部活動すべての中で吹奏楽部がトップだった。サッカー部と部員数を競い、その甲斐あって、吹奏楽員数は80名位になった。コンクールでA部銀賞になり、全国高文連「岡山大会」に出場したりした。悔しいけれど、コンクールA部金賞はついに取れなかった。春高には定時制があるので、午後5時以後の部活動ができない。また、中学校での吹奏楽経験者は圧倒的に女子ばかりだから、男子校の春高には経験者がほとんど来なかった。他の学校では夜の9時近くまで練習している。中学校からの経験者で、しかも入部オーディションをやって、上手な生徒ばかりを部員にする学校とは、勝負にならないではないか。春高在籍の16年間で、埼玉県吹奏楽コンクールで銀賞3回、銅賞3回、平成元年8月第13回全国高等学校総文化祭「岡山」の吹奏楽部門埼玉県代表校に選出されただけであった。悔しかった。

### 吹奏楽への編曲

春高時代には随分と吹奏楽編曲を手がけた。春高時代の編曲譜は、すべて手書で、定期演奏会で演奏するためのものである。「真夏の夜の夢」(1977)、吹奏楽のための「日本の景観」(1987定期演奏会初演)、「白鳥の湖」フィナーレ吹奏楽版(1988岡山大会初演)、「眠れる森の美女」序曲吹奏楽版(1989定期演奏会初演)、交響曲第5番第3楽章吹奏楽版(1989定期演奏会初演)、春高アンファール吹奏楽版(1990運動会初演)、ホルスト「惑星」全曲吹奏楽版(1992定期演奏会初演)、十二支より「午・寅・申」吹奏楽版(1992定期演奏会初演)、他に春高校歌・春高音頭・春高賢児母校よ春高吹奏楽版(1992応援行事用)、第17回全国高等学校総合文化祭テーマソング吹奏版(1992初演)全国高等学校文化連盟の歌吹奏楽版(1994初演)などがあり、第17回全国高等学校総合文化祭総合開会式ファンファールを作曲し、埼玉栄高校吹奏楽部が総合開会式で演奏した。



着任当時の吹奏楽部定演

## 3. 春日部高校時代の作品

私の作風は春高時代に芽がでてくる。杉農時代にさがしていた作曲法が、ある程度形になって芽が出てくるのが春高時代である。弦楽四重奏曲第1番全国学芸コンク社会人の部作曲部門第一席文部大臣奨励賞(1977.1.15)、ヴァイオリン・ソナタ第1楽章(1977.1.16、第13回葵の会初演1977.4.28)、シンメトリア I (1977.10.14第2回埼玉県新人演奏会オーディションにて演奏合格作品)、COLUMN—弦楽四重奏のための—(1979.8.8全音楽譜出版社刊行)、シンメトリア II—打楽器とピアノのための章—(1980.10.8、日仏会館にて初演1981.8.31)、オンドツイオーネ「波動」—2台のピアノによる—(1984.4.4第21回葵の会初演)。

弦楽四重奏曲第1番は、土肥先生の教えに従ってバルトークの弦楽四重奏曲をスコアリーディングして、当時の人間関係の鬱積した感情を曲に盛り込んだ。シンメトリアの2曲は、弦楽四重奏曲の音構成を使って、楽式を $Y=-X^2$ にまとめた曲。COLUMNはタンブラーを形作る

円形を曲にまとめた。オンドツイオーネはシンメトリアの楽式を踏襲しながら、音の構成が12音セリー同軸システムを生み出した作品である。以後は12音セリー同軸システムの確立を目指す。シンメトリアⅢ—4本のクラリネットのための—(1988.7.8 第7回蒼初演)、演奏会用ピアノ曲「可憐なる小さき歌」(1989.9.10音楽の友社刊行)、ピアノ・ソナタ第4番(1985.5.2第21葵の会初演)、オリジン・シンメトリア—2人の打楽器奏者とピアニストのための—(1990.7.59回蒼初演)、歌曲「あなたに会えて」山中茉莉作詞(1990.9.19第23回詩と音楽の会・音楽の社刊行)。ディメンション・スペース—弦楽四重奏のための—(1991.4.12埼玉県音楽家協会オ디션合格作品)。

埼玉県吹奏楽連盟副理事長をしていた頃、名取吾朗先生が吹奏楽コンクール審査員で見えられて、私を弟子にしてくれた。詩と音楽の会、日本作曲家協議会への入会と活動は、ひとえに名取先生の賜である。このことを契機として私の作風は大転換を遂げた。

#### 4. 転勤の経過

平成4年4月に突然の人事異動によって埼玉県立杉戸高等学校へ転勤になった。私の春高在期間は16年に及んだ。第15回全国高等学校総合文化祭「埼玉」吹奏楽部門部長のポストには自由に出張が出来る春日部高校に籍をおくことが望ましかったが、県教育委員会人事担当の意には高文連のトップをはじめ関係者全員、誰も逆らえなかった。高文連全国大会が終わった後の人事異動では、功績のあった高文連関係者といえど、県教育委員会の方針通り、移動させられた状況を目の当たりにするにつけ、この移動でよかったかと感じさせられた。

#### 5. 春日部高校時代の私的できごと

埼玉県立春日部高校時代の私の身のまわりの出来事を書いてみる。昭和53年10月6日長男史誕生。昭和58年8月6日頃群馬県勢多郡新里村大字高泉469-86赤城ロマンドにセカンドハウス新築購入。平成2年4月長女静華、東京造形大学デザイン科入学。平成5年7月23日赤城マンドのセカンドハウスを売却、東京都立川市富士見町1-9-7ビバーチェ富士見203を新規購入。

#### 6. 手記抜粋

##### 昭和51(1976)年5月8日

平素の生活の中で作曲したくても、雑用でなかなか作曲の時間が取れない。人間関係の中で、虚偽と人間模様とで幻滅を痛感する。およそ芸術を創造していこうという心境になれない私は、次の曲で、この「偽りの人間社会」を作曲しようと思う。そしてその中に、私の人生観を盛込む。第一楽章＝虚偽・無視・嘲笑。第二楽章＝孤独・不安・幻滅・自信喪失。第三楽章＝憤・闘争・チャレンジ。第四楽章＝勝利。

##### 昭和53(1978)年1月20日

文部大臣奨励賞をもらったことは嬉しい。それが今日、高音研の先生方に知らされた。いろいろな面でこうした事に対する雑念が、私の心に去来する。平静な心でいないと、私自身これから本当の意味で良い曲が書けなくなる。私は名誉が欲しいのだろうか。作曲の本来の目的は別の所あるはずだ。真の意味での芸術的本道を貫いた曲を作らなければだめだ。心の底から私の信念に則った曲。

しかし私の心の中には雑念がある。雑念からは真の芸術は生まれえない。曲は出てこない。曲は出てこないだろうか。逆手に取れば、人間の醜い心を。



シンメトリアの演奏

## 昭和55(1980)年9月24日

人間とはこんなにも生と死を見つめて生きる動物なのだろうか。それとも私だけか。生きる価値、充実した人生を全うしての死。こうしたことを誰でも常に考えているのだろうか。だから私は、自ずとすべての行動が真剣で、せっぱ詰まったものになるのかも知れない。人生に価値を求めて、いや認めてか。自分の作曲に価値を認めて生きる。これは天命だと私は思っている。

私は自分なりの作曲法を、ほぼ手中にした。形式も一つは自分のものになった。だからこの作曲法で、もっと曲を書きたい。そして、もっと別の形式を考え出したい。

私はまだ死ねないと思うのです。作曲法は完成しても、まだまだ私のスタイルが完成したわけはありません。私のスタイルを完成させたい。そしてそれが日本の音楽、伝統の日本音楽と、どう関わりを持たせることができるか、考えてみたいのです。それに私には静華や貴史がいる。この子供達が本当にかわいい。立派な大人にしてやるのが、私自身の責任だと思っている。

## 昭和56年(1981)年2月25日

私は今忙しい。連日のように帰りが10時半近くだ。何故かと言えば新企画が頭に浮かび、それを忠実に実行しているからだ。葵の会、埼玉吹連東部支部に新機軸を加えている。それはそれで是として、迷わずに実行に移し、今日までやって来た。しかし帰ってきたら、家族かみんな寝てたとき、いま、ふと疑問を持った。静華の教育はこれでよいのか。自分の作曲はこれでよいのか。私はこんな事をしていて、大成するのだろうか。神は私を今の姿で是としているのだろうか。人は皆、神の存在を思う。私も神の存在を思う。それは概して自然の神秘に根ざしている。一己の人間にも神の力が及んでいることは感ずるが、時々刻々の人間の動きにまで神の力が及んでいるものだろうか。自然の調和。運命、運勢。私は知りたくない。何故なら怖いのも事実だし、自分の本命である作曲活動は、持てる力を出し切って死にたいからだ。私は自分の人生を全うし、人生に満足しきって、万歳を叫んで死んでいきたい。やすらかに。やり残しは嫌だ。

私は、ふと書いたことがある。それは音楽的才能は、一般の能力とは違うということ。音楽的才能のある人と性格は、とかく直進的なのだ。世のすべての慣習に気のまわることは、まずない。ナイーブではあるが、直進的なのだ。私もそうだ。しかし私は、全てのことに全力でぶつかってる。そこに人生を感じ、自分のバランスを保ち、その人生観を曲にしようと思っている。一己人間として最大限にできることは、これしかない。これなら自分の良心に恥じることもないし、神も許したもう。何故なら自分の作曲姿勢に忠実でありたいからだ。40にして惑わず。そろそろ頑固になりつつあるのだろうか。謙虚でありたい。

「オンドラツイオーネ」は波動・うねり・起伏という意味である。この意味を水による波に固定して考えて頂きたい。命名の由来は形式感の設定による。つまり波の上の頂から下の底までを第一楽章、下の底の一点から次の波の頂までを第二楽章であると設定し、その起伏に従って曲を形成している。双方の曲の頂上付近には、いわゆるクライマックスを想定し、楽想の限りを尽くして激しい動きをもたせた。下の底の一点では、それとは逆の意味を持たせる目的から、まったく動きを止めた。従って「波動」とは、曲の形式構成からの名称であって、曲の内側にある意味からくるものではない。

完成した曲が、実際に音になったとき、あらゆる点で現在の私自身を見た感じがします。具体的に、ここがこうだから今の感情を表しているというのではなく、曲の推移の状況や動きが、そのまま現在の心境に当てはまると言うことです。この曲はいわゆる変拍子の曲です。拍子記号が記入してありますが、単なる目安としての意味しかもっていません。何故私が一定の拍子にとわれない曲を書くのか、それは内的要求と感覚にマッチした曲を書こうとする姿勢を忠実に実行したに過ぎませんが、書いている過程において、規則的な拍子からの解放であることを痛感しました。古代の音楽は一定の拍子から作られている曲も無論ありましたが、多くはそれほど明確な拍節は必要ではありませんでした。それがポリフォニーの発達から必要に迫られて正確な拍子楽譜が生まれました。そして現在は、その正確な楽譜に基づく規則的拍節と規則的リズムから解放の時代に入ったのではないのでしょうか。

現代人はあらゆる点で日常の雑務に忙殺され、理性・知性・因習その他の社会生活において本来の自己というものがなくなっています。この曲ができあがった時点において、はからずも自分本来の姿を見たように思うのです。しかしそれは、やはり社会生活の中での自分

に他なりません。時の流れ、今日までの年齢を積み重ねてきた自分です。副次的な意味でも、この曲が「波動」いう名前が当てはまるかも知れません。

この曲を始点にして、更なる自分、あるいは人間本来の姿を客観的に、内面的に創作しているかどうかはわかりません。私は今日までの創作態度がそうであったように、このようなことは意識せず、気の向くままに自分の創作意欲の赴くままに作曲していこうと思います。そして自分見つめていこうと思うのです。

葬送曲「ディリージェ」ー夢川勇先生と岩井和美君に哀悼の意を表し謹んで捧ぐー

### 昭和56(1981)年4月 4日

昨日の午後春高の山岳部員が春山で滑落し、生徒一人と夢川先生が行方不明になった。おそらくは死亡しているだろうという大方の見解だ。夢川先生にはご両親、奥さん、小学生の子供さがいらっしゃるといふ。どうしても無駄死にだとしか私には思えない。何故妻子を残して死ぬのか。責任の取り方は。その現場の状況、夢川先生の立場上の状況はどうあれ、残された家族の悲しみは。察するにあまりあると同時に、夢川先生の軽率さを責めたい。

40歳近くになったら、どうもいろいろなことが、理解しがたい状況が起こってくる。沖縄の日本軍の島民への仕打ち、基地での戦車の列、戦争で死んでいくのも無駄死にだ。私は最低、家族が私の死ぬことによって、悲しみの淵に沈む思いはさせたくない。

父が死んだときもそうだった。世の中は何も起こらなかつたように動いていた。事実、彼らにとって何も無かつたのだ。夢川先が死んでもそうだ。世の中には何もなかつたのだ。私は悔しいと思う。私自身が死んでも、世の中に何も起こらないのだろうか。何かショックを起こしてやりたい。それなりの仕事をしたい。私が死ぬことで、家族に死活問題の起こるような問題だけは作りたくない。その意味では「もうお前は死んでもよろしい」という域に達してから安心して死にたい。また作曲でも同じだ。自分で「私の仕事はすべて終わった」という状況になってから大往生といきたい。一生を見つめ、生きてる時に自分のなすべきことを全てやりとげて、安心して死にたいものだ。この心境で、3日くらい?で葬送曲「ディリージェ」を作曲し、吹奏楽部によって学校葬で演奏された。

### 昭和56(1977)年10月 17日

私は今アメリカ製のダンヒルというタバコを吸い、スペイン製のワインを飲み、思索に耽っている。その思索とは、日本人はみなおしなべて、充実感を味わって生活していないのではないかということだ。生活は、ほとんど80%強の国民が、一定レベルの生活をしていながら、心の満足感は味わえないでいる。それはやはり、精神文明がまったく破壊されているからだ。日本人は自らの、有史以前からの伝統的生き様を、明治以後放棄したのではないか?

音楽では少なくとも洋楽を教育に導入したことが、間違っていたのではなかつたか。意図的に、ヨーロッパ的機能と和声を導入したことは、日本の伝統音楽の放棄であった。美術面では洋画を取り入れて、日本画を尊重しなかつたことは、やはり間違っていた。彫塑では、日本の伝統的宗教を尊重せず、単に民主主義の尊重のために、神道を放棄したのは間違いであった。

日本人は知力では世界的にまさる。したがって世界のレベルに100年にして適合した。それは驚嘆に値する。しかし民族としての心を失ってはいないだろうか。それが心の貧しさとして残ったのだ。ユダヤ人に似ている面もあり、ブリテンに似ている面もある。東洋のブリテンだ。しかしロシア人はトルストイを生み、チャイコフスキーを生んだ。

私は今や、チャイコフスキーの悲愴の心境を愛する。社会に貢献しようとし、一生懸命頑張り、自分の才能を伸ばしつつ、何とかやってきたが、ついに自分の一生は無であったという落胆を愛する。今までの私は、自分は頂上へ登っても、充実感はないということは知っていた。しかし本能的に、寄る辺をそこに求めていた。しかし青春を過ぎた今、自分の何かを失った今、恐怖におびえている今、チャイコフスキーの悲愴が身にしみる。人はあの曲を死と呼ぶ。私はそう思わない。絶望であっても死ではない。あの曲の流れは生き様ではあっても、まだ死ではないだ。したがって、あの心境が好きだ。

私は今の自分の心境を分析し、おぼろげながら流れたテーマを系統化組織化し構成して、



この頃の私

私の全知力を結集した40歳代前半の傑作としての、自分の作曲システムを完成の域に到達させたいと思う。しかし自分自身、漠然としていて自分の心境が掴みがたい。無気力感、失望感、教師生活の凡庸さ、平凡な人生そのものの失望、そんなもので心が漠然とした「無意味」という感慨に取り憑かれている。作曲で吹っ切りたい。心境が無意味なところをもってきて、作曲は意味があることなので、また無意味な人生を意味あるものにする。この矛盾に耐えて曲が完成するか。これもまた自分使命か。

### 昭和57(1982)年 8月 9日

この夏休みは作曲する暇がない。精神的肉体的すべてに暇がないのだ。今私には二つのこと、つまり赤城に別荘をつくること、今年の吹奏楽コンクールの成績如何に、今までの私の教師としての精算が、かけられていると思えるような気がしている。

\*

死?死については随分と書いた。しかし死に際の私の現し身の姿は考えたことはない。私は相当長生きするのではないだろうか。例えば85歳とか。だから時子や静華や貴史が、私の死の床の面倒を見られる状態かどうかはおぼつかない。そう考えると85歳で人生を全うしたとき、私は大往生よりも自殺を考える。85歳位なら現し身も、生への欲求はなくなるであろうし、作曲の使命も充分全うできるし、現世には未練も何もない。そのときは喜んで自殺できる。しかしウジ虫どもに私の肉体を蝕まれるのは、私の好みではない。根っからおしゃれな私としては、死後の私の姿も美しくありたいと思う。だから、誰も行かないような所で、ひっそりと死ぬことはすまい。翌日発見できるような死に方がよい。しかも無様な格好でない死に方である。人の世話になって、床ずれを作ってまで生きることは絶対に嫌だ。自分で死ぬこともままならぬような生き様は絶対に嫌だ。人に殺してくれと頼むのも嫌だ。死期は、作曲生活が完成したと思えたとき。人生を全うしたと思えたとき。何だか、神が約束しろと、私の、この書いているところをじっと見ているようだ。

\*

私は創作意欲を失いかけているのではないか。私の内奥には女性が必要なのだと思う。途中で止まっているピアノソナタは、神がテーマであり、女性とは何ら関係ない。暇がないのも事実で、あせって下手なテーマで作曲しても仕方がないではないか。何とか充実した作品にしたいものだ。

\*

人生なんてはかないものさ。人はみんな孤独さ。世の中の全てのことが、うっとうしくなった。日常の茶飯事すべてがだ。赤城に引きこもって心の洗濯がしたい。人生を全て思い返してみたい。自身を反省し、世を思ってみたい。

### 昭和57年4月10日

ついに私は、一つの見識の持てる人間になったように思う昨今である。自分自身が解ると共に、他人も解るようになった。と同時に尊敬できる人間が一人として居なくなってしまった。人間それぞれの、ある部分は尊敬できても、人物全体を好きになれることは、もう私にはできない。本当に私は人を愛せない人間だろうか。いや、私くらい人を愛している人間は、いないのではまいか。人を理解しようと常に努力し、誠意を持って人にあたる人間。全身全霊で人にあたる人間、それが私であるはずだ。私は女性にのめり込むことができなかった。なぜなら私には音楽しかなかったからだ。そのサイドに家庭があり、二つの外側に人間社会があったのだ。この枠組をすべて打ち破って、音楽と同等になりうる女性はいなかった。春日部高校に入ってから、学校のことも、殆どこの日記に書かれていない。春高はそれだけ心配ない学校だし、先生方も生徒達も優秀であったからだと思う。心をくだいて事に当たらなければならぬ必要性がまったくないらだともいえる。

一目見て、人を判別できるようになった僕。一目見て、人を判別しようとする僕。一目見て人を判別して、それが当たっているような気のする最近の僕。

所詮、人生なんてはかないものだ。自分自身、悔いのない一生を全うするより他ないではなか。それが人生だ。

### 昭和57(1978)年9月16日

父は58歳で世を去った。晩年の父が言ったことで、今でも私の耳に覚え、状景まで脳裏に言葉がある。「書道やるのも金のため、一枚いくらで売れるからだ。みんな金のため」。若かりし父にも、書に対する理想があったに違いない。それも年とともに崩れ去ったと言うこ

とか。今の私には心の支えはない。コンクールで入賞できなかったことで年輪を感じ、焦燥を実感として受け止めている。コンクールに入らなかったことだけで、実生活そのものに活力をなくしている。役員をやる器ではないと思えるし、人の信が得られない感じがするし、生活に活力がない。

## 音大作曲卒業のある先生との問答 昭和57(1978)年2月

研究授業資料に基づく音大作曲卒業のある先生との問答の問の部分。①春高生だからできる②音程の中の全音と半音、旋律移動(移調)。③和音は解らないのではないか。長三和音、短和音の区別を説明するのか。④転回和音の説明なんて、このプリントを見ただけで「アッ、ダメダにならないか。⑤[a]はIの和音で動き、[b]はVの和音で動くということを言うのか。⑥Vの和音の終止形はやらないのか。⑦テーマをはっきり設定する必要がある。⑧授業のどの部分を見るかという問題。完成された曲を聞くよりも途中を見たい。途中を見ても仕方がない(修学旅との関係)。

私の答えの部分①研究授業のテーマの設定は創作の作品発表会である。創作は作曲の音楽会になって、初めて花が咲く。全員で評価することにより、参加の意識を高める。②作品発表にした理由=修学旅行との関係で出席者が多くならない。途中の授業は見栄えがしない。焦点が絞りにくい。③作曲という行為は、やはり一定の学力が必要である。それはごく普通の一般的レベル考えて、自己自立の精神、自主性と意志意欲とも関係して、中学1年生~3年生の年齢と学力が必要であると思う。④教材の設定は、基礎から作曲までを段階的に関連づけて、無駄を省いて系列化した。その中で演習を中心として与えていく工夫をした。特色=形式説明の曲例は、すべて自分で創作した。これは創作するという行為の役立つと考える。

## 創作教育がむずかしいということ 昭和58(1983)年12月30日

創作教育がむずかしいということ

実際、書を1枚も書かずに書道教師になった人はいないし、絵を1枚も描かずに美術教師だった人もいない。しかし作曲を1曲もせず音楽の教師になった人の方が多いという現実。②作曲科を卒業しても演習のみをやってきて、実際にソナタを一曲も作らずに卒業できたことで、作曲の心を教えられないという現実。③和声学と対位法をマスターせずして作曲するべからずという世の現実よ。

作曲をせずして教師になった人は計り知れず、作曲科を出ても作曲の心を知らないという人計り知れず。作曲の師たりうる人は、音楽教師の中に殆どいないと言って良い。作曲指導のできる人は、皆無に近いといえる。

私の研究授業自己批判

①作品発表会をやった場合、授業が良ければよい程一般教師との隔絶が広がる。

②成功しなければ、それは和声学と対位法をしっかりせずして作曲をやるべきでないとの批判に結びつく。いずれにしても成功はあり得ない。時代に先んじているのか。やることがあまりに高度なのか。凡人としてのセンスがないからか。世の人々を理解しない私なのか。やることがあまり究めていると、隔絶を招くだけだ。



## 絵を描かない画家 昭和59年 1月10日

そう言えば、理科の先生がおっしゃっていた。絵を描かない画家がいると。理科の先生はその人を評していい奴だと言っていた。絵を描かない画家、書を書かない書家、彫刻を彫らな彫刻家。歌を歌わない歌手、ピアノを弾かないピアニスト、何も演奏活動をしな演奏家。患者を診ない医者、誰かがなまくら医者って言ってたな。切れない刀は、なまくら刀だ。用をたせない者や道具をなまくらって言うんだな。芸術家で、何もやらない人は、芸術家ではない。何も売る気のない店ってあるか?そんな店つぶれてしまう。自分の選んだ道でありながら、何も創作活動をしないで、よく生きていけると思う。私など良心の呵責に苛まれて、とても生きていられない。作曲をしないで良心の呵責もなく、神の咎めもなく、遊んで暮らしたら、この世は何と楽しいことだろう。そのようにして生きていける人が、正直いってうらやましい。私にはそのような生活は、絶対に許されないし、やろうも思わない。退屈で死んでしまう。最高の学府を卒業して創作活動やステージに立つこともなく、呑気に生涯を閉じられる人が信じられない。

## 兄の退職 昭和62(1983)年 4月 6日

兄が学校を52歳で退職したという。一つの方向として非常に関心をもてた。私は定年前に辞職するなど考えたこともなかったし、家のローンすべて60歳を目安にしている。その意味か「ガン」と頭をなぐられたようだ。兄は小さいときから絵しかなかった。教師の仕事をろくにやらず、保健室で絵を描いてばかりいたようだ。私もいいかげん眼を覚まさないければ。

## 仲間が私を憎む 昭和63年8月

一緒に仕事をしながら、仲間が私を憎む。自分の行動力の至らなさを考えてか、私を排除しようとするかに見える。先々の見通しを立てられず、全体を見通して前進させる力がなくて、私を憎む。若い人々や、円満な人達が周りにはいるときは、あまりこうした事には触れたくない。が、相手は私に我慢がならない。その人と私の間には溝が生ずる。生じた溝は双方が努力しても無駄で、完全に解消することは不可能である。そうした状況下に生きた一箇の人間として、私は努めて、温かい真心のある人間として生きようとしてきたし、今後もそうする。教育は現場が大事だし、人間関係は庶民が大事である。最も人間らしい赤裸々な姿がそのあるからだ。そうした状況を理解して、真心で接していこうと努力する。

## いろいろな重圧 平成元年1月

最近、とみにいろいろな重圧を感じる。吹連の副理事長という立場や高文連の副部長という立場での白い目。春高に13年もいるから早く転勤せいというあからさまな牽制。春高同窓会より、私が春高卒でないことからの他人行儀。畑光明先生がよくおっしゃっていた。『三界に身をおく所なしだよ。だから己の実力をもっとつけて、他人のつけいる隙を与えるな』と。自分で言うのははばかりだが、私は円満な人格の持ち主の方で、埼玉の音楽教育界を考える場合は、常によりよき方向にもっていこうと努力しているからこそ、これだけの立場にいられる。その自覚がなければ、己を偽っていることになり、自分自身とても今の立場にはいられない。

## 高文連全国大会「岡山」 平成元(1989)年4月頃

高文連全国大会「岡山」に春日部高校が県代表校に推薦された。三年生も含めての全部員で加するために、保護者に宛てて手紙を書いた。以下は手記に書かれた草稿である。

本日、三年生のみで話し合いました。三年生は素直に喜びたいのですが、受験の年を迎えるあたって素直に喜べません。その上、せっかく全国に行くチャンスに恵まれたにもかかわらず、岡山に行くことを放棄しようとする三年生が何名か出てきたからです。そこで話し合った結果、顧問である私が保護者の皆様にお手紙で許可して下さるようお願いし、同意して下さる方は、同意書にご署名捺印してご提出いただくことにいたしました。

私は教職について25年になります。音楽の教師は、部活動をやっていない人は、教職の70%を情熱の上で注いでいないと考えます。部員が少ない年は、学校生活の一年間が暗く、部員がたくさんいる年は、その一年間が明るく楽しく、やる気充分であることを25年間続けてきました。吹奏楽部創設以来の快挙をなしとげて、来年度は新入部員が35名入ることが確実であり、総勢100名を越えて全国に行くという全盛期を迎えることになります。まさにその年が春高創立90周年になるわけです。

人間性を思うとき、高校生活の三年間は、はかり知れない影響を与えるものだということをは実感しております。成人しようと言うときに、伴に共通の目標をもって進み、仲間を思う気持ちを純粋に考えることは、高校生活三年間に培われるべき事柄であるからです。一方において受験とは、一個人が人生の一定の地位を得る関門であります。個人として親として、この関門を無事通過することを考えるのは当然のことです。大学を卒業した日本人は、すべての関門を通ってきた人間です。これは私の私見ですが、部活動を高校、大学でやってきた人間は、事を考えるとき、第一に自分ではなく、広い視野で物事を考えて、自らの立場を考えることができる人間になると確信しています。これは日本男子として将来大成する上での不可欠な人間的要素になりうる条件ではないでしょうか。

人間の一生のエネルギー、情熱を考えます。行動力を思うとき、その情熱はどこから来るのでしょうか。大いなる目標を持てる人、光や知性に見える人は、自らが体験しなくては、理解しようのないことですし、そうした知性が、次元の高い判断力となるのだと思います。これらの事柄が人間の真髄にせまる事柄であり、巾と奥行きをつける事柄であると思います。そ



の趣味においても、三年間に音楽の真髄にせまれると考えます。生徒達が音楽を創造するときに「光る」ものを体験できたとすれば、それは生徒達の将来の専門職の中で、必ず応用される要素となることを、私は自らの体験の中で確信している者です。

高校の授業とは、たたき込まれる学習であっても、否応なく習得され、否応なく生徒達の知性を磨いていきます。大学受験とは、学習の成果をはかることが基本でしょう。大学に入るためには本人が自覚して、それに対処するのが、これまた基本であるはずで、私が思うには、自ら大学を自分の方向性で選び、受験勉強すべきです。これが計り知れないエネルギーになります。人のエネルギーとは不思議なもので、押しつけでは湧いてこないものではないでしょうか。私は高校三年のとき、秩父高校で合唱部の部長をしておりました。最後の年に指揮をし、独唱のステージを持ち、合唱の伴奏もいたしました。これが11月です。しかし夏休みに市立図書館で開館から閉館まで勉強しておりました。現役合格の確立が少ないにもかかわらず、合格者仲間に入ることが出来ました。昨日の話し合いでも、このことを生徒達に話しました。

幸いにして吹奏楽部は受験意識の高い部活動です。東京大学をはじめ、数多くの名だたる大学に、数多くの生徒達が入っております。その意味でも春高における吹奏楽部の存在意義は大きいと考えております。ある年など東京大学合格5名中の3名が吹奏楽部だったことがあったのも、つい近の出来事です。これらのことは生活している環境の中で意識が高められて、共通の目標を達成し、次の自分の目標に向かって突き進むエネルギーが生み出される要素となるのだと思います。長い歴史と伝統を持つ春日部高校に13年の長きにわたって在職し、年を経る毎に春高とその生徒達への愛着が深くなり、教職に就いていられる喜びをかみしめている昨今であります。今回の県代表校になったことについては、春高と部員の生徒達が大変よろこんでくれて、本当に良かったと、しみじみとその思いをかみしめております。

#### 平成4年2月26日（火）

平成5年度に全国総文祭「埼玉」が開かれる。私は現在総合開会式の準備委員吹奏楽部会副部長をやっている。総合会式準備委員会では「文化を正面から見つめた」案を提案している。細部にわたった対案は現在のところ出ていません。吹奏楽部会では平成元年度から平成4年度まで、環境作り、組織作りに取り組み、これから本格的に準備を進めていこうという重要な時期であります。こうした提案をしている私としては人事異動は不可能で、全国総文祭「沖縄」での会議があります。春日部高校にいて副部長をやっているからこそ、各校吹奏楽顧問の先生方が協力してくれているからです。人事異動があると、せっかく作った組織が総崩れになる恐れがあります。人事異動するからには、最低3年間は新しい学校の中をじっくり知ることには力を傾注することが義務であって、週に二回三回と出張できる立場ではなくなります。私の年齢から考えて、新しい学校になったからには、校務分掌上も重要な任に着くことになりません。出張はできない立場にたざるを得なくなります。



全国総文祭「沖縄」での会議  
中央が田中部会長、左から岡戸、沖縄の役員、神田、  
右が八木原の各氏と私